

---

I love You

naoki

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

I love You

### 【ZPDF】

N7766B

### 【作者名】

naoki

### 【あらすじ】

Under the Blossomシリーズの短編。愛していくと  
言ってくれ(?)。

『歐米では夫は妻に毎日愛してるよと言わなければならぬいそうですが…』

「クロウさん？」

大人しくテレビを見ていたはずのアンフィエルが声を跳ね上げて、どうしたのかとクローレンは洗いものをする手を止めた。

「はい？」

「クロウさん、クロウさん！」

「はい。聴こえますよ」

ぱたぱたと子どものように足音をさせてアンフィエルが駆け寄つてくる。何度もなく呼びかけられてもいやな顔ひとつせず、むしろ嬉しいだけのクローレンは微笑んで彼に向き直った。

「何ですか？」

「あのつ、あのねつ」

透き通りのように白い頬を紅潮させて、桜色の唇が必死に言葉を紡ぐ。わらわと肩を滑り落ちる白銀の髪も麗しく、生来の美貌も相まって今すぐ抱きしめたい愛おしさだ。絶世の美女を描いた絵画の如く、「綺麗」と称するのが相応しい完璧な美貌を持つアンフィエルだったが、クローレンにかかるば彼は「可愛い俺の天使」なのである。

笑顔の裏で今日も可愛らしい恋人を絶賛しつつ、クローレンはエプロンで両手を拭う。穏やかに次なるセリフを待つて居ると、アン

フィエールは耳まで薔薇色に染めた拳句に、

「あつ…あいつ…愛…」

泣き出しそうに眼を潤ませて、ヒツヒツ顔を覆つてしまつた。ぎょっとしたのはクローレンである。

「え？ え！？」

「じめん…クロウさん…」。僕…やつぱり無理…」

「ど、どうしたんですか！？ “アイ”…なんですか？」

慌てて細い肩を抱き寄せ、屈みこんで顔を覗き込む。そつと顎をすくつて上向けると、水仕事で冷えた指先に、アンフィエールはびくんと震えた。

「エル？ どうして泣いてるんです？」

困惑し果てた声音で問うと、長い睫毛を震わせて、ぱたりと零を落としながらアンフィエールは眼を伏せる。

「さつき、トレービー…夫は妻に、毎日『愛してや』って言つものだつて言つてて…」  
「？ …それで？」  
「僕、あなたに毎日言つてなかつたと思つて…それで…」  
「…………」

空色の瞳を大きく見開いて、クローレンは硬直した。  
アンフィエールは何が哀しいのか、ぽろぽろ涙を落としながら言葉を紡ぐ。

「でも、面と向かって言おうと思つたら、やつぱり恥ずかしくて……  
そんなの、ダメだよね？ 夫失格……つ、わ」

さゆうつと力の限り抱きしめられて、声が上擦る。紫苑の瞳をぱちぱちと瞬いて、アンフィエルは困惑氣味にクローレンを見た。

「クロウさん…？」

「いや、もう…俺が妻ですかとか、いろいろシッコ!!たいとは思つたんですけど…すみません、なんかもつ可憐すわよか」

首筋に触れる唇と、背を撫でて下りてくる掌に甘い声をあげ、アンフィエルはびくんと体を振るさせた。きゅっと眼を閉じて腕を回した背中に縋ると、鎖骨を辿る舌先が吐息を洩らして名前を呼んだ。

耳を掠めた声にはつと眼を見開いて、アンフィエルはそれに応えるべく唇を動かしたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7766b/>

---

I love You

2011年1月27日03時12分発行